

地元が鷺宮町(合併により、現在久喜市)なので、町民の一人として、私の知っている鷺宮町を重ねながらこの作品を観たが、まだ鷺宮町に住んで間もないので、ただの一鑑賞者としてもこのレビューを書きたい。

まず鷺宮町は、都心から電車で約一時間ほどに位置する、時間のゆっくりと流れる穏やかな町である。近年、アニメ「らき☆すた」の舞台のひとつになるや否や、ヲタク文化で新たに活気付いてきている。関東最古の鷺宮神社がアニメ舞台になったため、鷺宮神社には「らき☆すた」ファンを含め、毎年多くの人々が訪れるようになった。地域の人々の理解と協力のもと、商工会による様々なイベントや企画は、訪れた人々をその地域に温かく受け入れ、一方で経済面でも大きな効果をもたらし、町おこしのひとつになっている。鷺宮町は、古くからの文化と新しい文化が融合し、日々独自の文化が創られている町なのである。さて、この「鷺宮☆物語」は、上の現状を背景に、SF要素とパロディを存分に交えて物語が展開されていく。簡単にあらすじを述べると、アニメ「らき☆すた」を契機に、町のPR映画を作成しようと、一人の青年が映画作成に奮闘するというものである。主人公が町の商店街をまわりながら、映画のネタづくりをするシーンでは、そこに実際の商店街の人々が出ていたので、演出でありながらも、どこかリアルさを感じられ、ほっと和めるものがあつた。実際、地域の交流が希薄になりつつある現状を踏まえると、町民でありながらも、このお店はこのような人がやっていたのかと、初めて知ることが多かった。このように、この作品には、新しく知れる町の顔が、存分に詰め込まれていると感じる。また一方で、ヲタクの聖地巡礼の様子も、現実の状況にそくしながらもユーモア満載で描かれてあつた。作品に登場する、鷺宮神社にかけられた絵馬は、まさに普段からあのような感じである。そして、実際に町の土師祭で担がれる神輿が、映画内に出ていたのだが、とんでもないものに変形していた。神輿がSF要素で用いられるなんて、いったい過去に誰が想像したであろうか。しかし、何よりも私が、この作品で一番見ものだと感じたのは、「超個人的趣味規制法」により弾圧されたヲタク達が立ち上がるシーンである。リーダーの合図をもとに一斉に駆け出すシーンは、迫力があつた。その直後に、田舎町にはふさわしくないスナイパーが登場し事件が起こるのだが、事件の被害者が、実際には町の和菓子屋の主人であることを知るとなぜか笑ってしまう。このように、この映画は、大多数が町民や有志の人々で演出されていて、プロは少ない。しかし、その点で、俗すぎずに、良い按配で地域感の出た、味のある地域映画になっていると思う。時々リアルなのかどうかはわからなくなるほどの独特の世界観を持つ作品であるが、実際に、町に繰り出して、いろいろと確かめたくなる映画だと思う。

ペンネーム：W(わしのみや)・S(しょうこうかい)・クラーク  
(学生・学部4年)